

こおろぎ

発行日 2005年1月1日 No.142
発行元 株式会社
オリジン・コーポレーション
代表取締役：杉井保之
〒426-0044 静岡県藤枝市大東町777-1
TEL 054-636-4300 FAX 054-636-6187
E-mail origin@ck.tnc.ne.jp
URL <http://www.origin-co.com>

春野東中学校

先日は本校の教育活動のために、年末のお忙しい中、トイレ掃除にご協力をいただきましてありがとうございました。スタッフの皆様から、生徒・職員にお手紙をいただき、たいへん恐縮しております。またひとつ大切なことを教えていただいたように思います。この春、本校を卒業した薫君を知る職員・生徒は、自分の想いを後輩の前で堂々と話す彼の姿を見て、言葉にならないほど心打たれていたようです。薫君には一年生に従兄弟がおりますが、彼が薫君のことを「僕の兄ちゃん」と私に教えてくれました。その嬉しそうな笑顔がとても印象的でした。彼は今までの中で一番幸せだったのではないかと思います。本校は、今年度をもって閉校となりますが、皆の心にとてもよい思い出を刻めたと思っております。本当にありがとうございました。

今日は貴重な時間をさいて、本校に来ていただき、ありがとうございました。教師という立場を忘れて話に聞き入ってしまいました。特に「努力を積み上げる」「今ある幸せを味わう」という話は心にグサグサと突き刺さりました。どうしても執務に追われ、当たり前にある幸せを「当たり前」と見逃していた自分と向き合うことができました。今回、特に嬉しかったのは、薫君の頼もしく成長した姿に出会えたことでした。この春まで二年間、教室に入れなかった薫君が、母校のトイレ掃除に来て、全校生徒の前で発言する姿を見て涙があふれてあふれて・・・。杉井さんに京丸園さんへの就職を紹介していただけたことを幸せに感じました。ありがとうございました。これからも薫君のこと、よろしく願います。追伸 三年間の在学中に覚えてもらえなかった私の名前を、今日、ついに覚えてもらえました。大変嬉しかったのですが、在学中、名前を覚えてもらつたことをあきらめてしまった自分を恥ずかしく思いました。

安い床屋

私がよく行く床屋さんは、シャンプー、髭剃りまでして1,800円です。家からも近く、その安さと速さにひかれて行っているのですが、その対応はひどいものです。

特に店長さん(?)に当たったら大変です。「どうしますか?」と聞かれて、すぐに、そしてわかりやすく答えないと途端に機嫌が悪くなります。私のようにファッションに疎い人間は、上手に説明が出来ないのでいつもドキドキしながらカットしてもらっています。

以前の私なら、きっと不愉快になったと思いますが、最近の私は「そんな対応をしたら損なのに」と、不快になるどころか、少し同情を感じていました。

私は、そんな自分を「私も大人になったものだ」と思っていたのですが、よく考えると自分で選んでその店に行き、お願いして髪を切ってもらっているのです。私は、自分がお世話になっている人のことを見下すことで、自分が不快にならないようにしていたと思うのです。私も事実を認めていませんでした。トホホ・・・。

最近、心をあらたにしようと思って家計簿の見直しと貯金を始めました。おかげで積み立て貧乏になりました。一万円生活のテレビ番組を見ても、お金がなくても笑って生活できることがすごいし、アイデアもすごく、貧乏は幸せなのかなと思っています。私は少しでもゆとりがあるという贅沢をしがちです。しばらくお昼におにぎり二個の生活ですが、これしかないと思うと、おいしいです。寒いので冷たくもなりますが、恵司君にお弁当のおかずを分けてもらったりしています。二人で、薫君はいいよねえ。ご飯を食べられて、いつか私たちも食べられる日がくるかもね」と話して笑っています。恵司君も薫君もシチューが好きなので、また作ってあげたいと思っています。

判断の基準

高校生にアンケートをとったところ「学校に行くかどうかは、自分の自由である」という問いにYESと答えた学生が78%いたそうです。ちなみに、自由の国アメリカではYESと答えた学生は50%。中国や韓国の高校生は約30%でした。

戦争に負けて以来、日本では異常なほど「個人」や「自由」が尊重されるようになりましたが、自分で判断すれば何をしてもしっかりでしょうか?自分で決めることは大切なことだと思いますが、わがままとの境は、どこにあるのでしょうか?

私も学校に行くのは子どもの自由だと思いますが、そのために親が働いてくれていることに気づかない人は、不幸だと思います。恩にきせる意味ではなく、事実気づいていないからです。

もし私の家なら、学校に行かないかわりに家事を担当するか働いてもらいます。働かなければ生きていけないのも事実だからです。

事実を無視して生きることには無理があり、その結果、自分が生きにくくなると思うのです。

しかし、誰かが鳥のクビを撥ね、内臓を取り出してくれていることをどれだけの人か今、意識して生活しているでしょうか?ゲームをバーチャル(非現実的)と言いますが、私たちの生活もどんどんバーチャル化し、平気で事実を無視した判断をする人が増えてきている気がします。

そうしたバーチャルを支えているのは親たちなのですが、それで子ども達は生きていけるのでしょうか?

1970年代のフランスでもそうだったように、日本でも外国人の就労が解禁されれば、外国人は良い仕事を得るために必死に働き、勉強をするでしょう。その時、したくないことをしないで育った日本の子ども達が、自分の求める仕事に就けるのでしょうか?

以前、「閉じこもりは、必要」という記事を見たことがありますが、閉じこもりをしながらどのように生計をたてたらよいか、私にはまだわかりません。逆に、事実から遠ざかれば遠ざかるほど、こうした問題が増えていく気がしてならないのです。

自由の国アメリカよりも自由になった「日本」は、世界一バーチャルな国なのかもしれません。もう一度、人との関係の中で生きているという現実を確認する必要があると思います。

バーチャルのツケを、子どもたちに回すのはかわいそうです。

今月の推薦図書 池間哲郎著

「あなたの夢はなんですか?」

私の夢は大人になるまで生きることです」(致知出版社)